

# 旅行がない！

## 千葉 晃央



●職員：

「この旅行のウリはなんてたって、神戸牛！夕食にはお肉がたくさん！見てください！このおいしそうなお肉！これで 1 人前です！」

「おなかすいた～」

「おいしそう～！」

「そんなん食べたことないで～！」

●別の職員：

「この旅行プランのポイントはエビです！この写真の大きなエビをみてください！そして、なんととってもビーチがあるところ！このきれいな景色…」

「やっぱりビーチは最高やな～」

……見ていた先ほどの神戸方面担当職員：

「おいおい、季節がちゃうがな！夏の海の写真使うなよ～、行くの秋やで～」

●これまた別の職員：

「こっちは温泉！みんな、温泉好きでしょ～！みてみて！これが露天風呂！」

「お～！」「オ～！」

「ええ写真やな～♡」

■RKS（旅行先）総選挙！

これは、旅行先選定のためのプレゼンの様子です。昼食後、利用者が集まって、その前で職員が話をします。行事は集団という支援の力を発揮する大事なグループワークの一つです。プログラムや目的地の選定も、当事者である利用者の方々が決めるのが基本です。なかなか、この過程を大事にすることは大変ですが、できる限り丁寧に取り組んできました。

私のまわりでは、最近では旅行代理店に入ってもらっています。それは何かあったときの対応人員数、対応策の点で、代理店という予備力を持つことが有益であることや、プロによるより充実したプランの作成のためです。

行き先は、予算とにらめっこをしながら、複数の案を考えます。そして、各案に職員が 2 人ずつついて、利用者の前でプレゼンテーションを行います。それが先ほどの場面です。その内容も、言葉だけではなくポスターをつかって、視覚でも訴えます。立ち寄る目的地の写真、乗るバスの写真、食事の写真、忍者ショーのイケメンの人の写真など様々なものが貼られます。

交通手段ですが、利用者の方もバスが好きな方、電車が好きな方それぞれです。しかし、電車ははぐれてしまうと、大変です。

特に旅行のような長距離の移動では乗り遅れると大捜索になります。ですので、観光バスがほとんどです。バスもできればトイレがあると本当に助かります。

### ■代弁者として

先ほどのプレゼンの場面に戻ります。各ポスターは、いろいろなメッセージを発信します。職員も職員自身がいきたいところを担当して、そのプランのプレゼン担当になります。それは、その案に賛成する利用者の代弁者でもあり、ソーシャルワークの一つの機能です。「この写真の方がええんちゃうやろか?」「こっちの方がいいんちゃう?」と仕事が終わった後になっても考えます。いろんなガイドブックから切り取ったり、コピーをして貼ったりしてポスターを作成していきます。

(イメージ写真)



そのプレゼンテーションの後、施設の廊下にポスターを貼り出します。休み時間にはみんなもじっくり見えています。それを見る姿勢は壁に対して肩と肩を並べる横並びです。コミュニケーションが促進される並び方の一つのです。普段は話をあまりしていない、意外な人同士で話しをしているという場面にもよく出会います。「前いったことあるわ」「えーなー」「でも、もう一回行きたい!」と盛り上がり、日常とは違う会話をもたらします。「この写真ええわ～」とじっくり見たり、「これ食べた～」とここにいきたい!と本当に楽しそうです。

### ■たのしみにしすぎて…

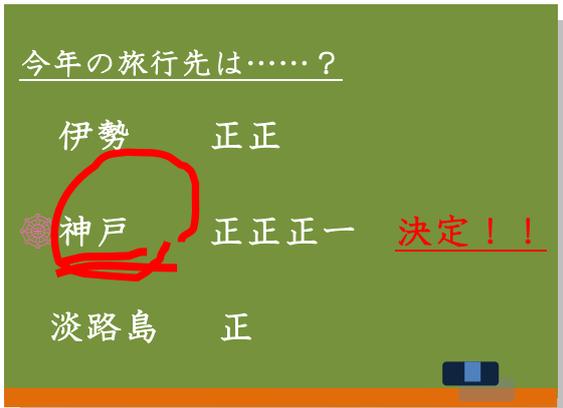
この陽性感情だけならいいのですが、それだけではない部分も触れなくてはなりません。陽性の高揚感の勢いはその「慣性」からか、はたまた高揚感による「疲労」のためか、翻って陰性のものも生み出すことも多いです。援助職は、それも踏まえて挑みます。

「事なかれ主義」で、そういう要素を排除しようという意見もありますが、私はそうは思っていません。そういうことも含めて「普通」だと思うからです。「雨降って地固まる」というように、結構お互いに許したり、謝罪をしたり、水に流したりということも多いです。いわゆる世間一般よりも…かもしれません。

「障害がある」から、「こだわりが強い」から、「後ろに家族がある」からなど、「弱気の虫」の誘惑は多いですが、覚悟の上で取り組むことだと考えています。それはもちろん個人的な意見で、それを発信しながらも組織としての決定に沿っていきます。

## ■開票速報！

一週間後にいよいよ投票です。各職員が自分の担当ケースの希望を把握します。その個人の意見をくみ取る方法も言語が苦手な方はポスターを指でさしてくれることも多く、ポスターが大活躍です。そして、みんなの前で開票作業です。



というような古典的な「正」の字で一票ずつ開票をしていきます！そして、一位が決定！赤のマジックで当選花マルマーク！！「やった～！」と喜ぶ声がある一方、「え～！」「もういややわ～！」という落胆の声も。

## ■多数決さえしたらいいのか？

そこから職員の仕事はあります。多数決できた案を、そのまま採用していたらいいわけではありません。最終的に旅行のプログラムは、この投票結果を大いに繁栄して、決めていきますが、ボツになった案にも票が入ったように魅力があるわけで、その声を反映したプログラム作りもします。例えば、ボツ案にあったお肉料理に変更したり、他の案にも入っていた体験教室を組み入れたり等も検討しながら詰めていきま

す。こうして、「みんなで」作った旅行プランを、「みんなで」楽しもう！というようにしていくのです。

昔読んだアメリカ小説で「民主主義とは多数決ではない。多数派の人たちが自分たちの意見が通ったことだけで満足するのではなく、少数派の人の意見もできる限り反映するなど、少数派の人も納得がいくように進めていくよう努力するものである。その責任が多数派にはある！」というセリフがありました。まさしくそんな感じです。

みんなで考えた旅行プランは、「われわれの旅行」となり、それらのプロセスをみんなで体験することで、ソーシャルワークという「われわれ感情」というものが生成されていきます。その「われわれ感情」がグループワーク場面での援助の資源の代表的なものであることは、言うまでもありません。毎回の旅行が、このように丁寧に行えてはいなかったかもしれませんが、そうなるよう最大限努力をしました。そこにいたるやり取りでは、職員間、職員の上下間、同僚間のなかでのやり取りが繰り広げられました。このようなプロセスを踏むことを大事にする意見もあれば、そうでない意見もあります。

そこでは、いつも自分の中には答えがあります。「誰のための施設ですか？」「職員の労働保障のための福祉施設ではありません」「自分が利用者だったらどうですか？」というものです。なかには同じような問いも持ちながら、結果が違う仲間もいます。自分は上記のような立場を好んでいます。

## ■旅行をとるか？収入をとるか？

こうして、旅行の計画は進んでいきます。

作業を止めて平日に旅行に行っていましたので、旅程は一泊です。そうでないと、一か月の稼ぎに響きます。これまでの連載で述べてきたように、1 工程約 1 円となるといくつやったか？どのくらい長く働いたか？で、知的障害者の実収入はかわってきます。つまり、いかに作業時間を確保するかが重要になってきます。

一方、法的にも余暇の提供という責務は福祉施設に義務づけられてきました。ですので、施設が行う行事も、あまりそこに時間を割かれてしまうと作業工賃が上がらなくなってしまうという「ジレンマ」があります。

そもそも、私のまわりの実習費が高い施設には、経済的支援が必要なケースが利用者となっていることも多いです。そのため、高い実習費を提供することは、おろそかにはできないのです。

### ■私はいない方がいいのではないか

障害者自立支援法へと制度が代わる段階において、出勤した利用者の分だけ、公から費用が出るように制度がかわってきました。以前は、出欠に関わらず、人数分出ていました。なので、通所施設の場合、体調等の理由で施設に在籍しながら、実際に登園、出勤できていない状態であることの意味が大きく変わりました。休んでいると、そのことで利用者の家族が施設に罪悪感を持つということが起こってきました。長期にわたる場合はなおさらです。障害を持った本人側（家族含む）にとっては、自分の籍のところに他の人が入った方が施設は経営的にいいのではないか？うれしいのではないのか？はやく辞めて欲しいのではない

か？そんな疑心暗鬼に陥るような不安が、施設に通えていないという悩みを持つ家族の上に更にのしかかり、気持ちを浸食していくのです。

### ■毎月行事に行っていた！

このような状況を打破するために施設は休日としてきた土曜日も開所し、出席実績を積み重ねたり、行事を休日にまわしたり、思い切って行事の削減をし始めたりしました。

行事は、私が勤め始めた 15 年前は月に一回、行事で外出していました。社会資源を利用する場面を多く持ち、社会での経験を増やしていく、そして仕事を離れてリフレッシュをする等を目的として行われてきました。現在、就労関係の福祉現場では年数回というのがほとんどのように思います。施設によっては、行事を施設全体で行うのではなく、一般企業のように働く場が提供する「福利厚生」機能と位置付けて、休日に行事を自由参加で設定し行っているところもあります。

その一方、社会資源として余暇利用の事業を行っているところが地域にできていったというのもあります。しかし、これも人口が集中している都市部と郊外地域とでは、その整備状況は大きく異なります。

### ■旅行のためにがんばる！

ある先生は言っていました。「施設の利用者は、一生懸命働いて、多くない実習費の中から、毎月少しずつ積み立てて、1 年に 1 回だけの旅行を楽しみしてきました。今年の旅行から、来年の旅行までという 1 年。来年の旅行まで、また 1 年頑張ろう！とい

うサイクルがあったのです。それなのに、このような旅行がない！という状況になって、働いてばかりで表情が本当によくない、楽しみがなくなっている！」私も全くその通りだと思います。付け加えると職員側の自分自身も同じ思いです。

ある施設に行った実習生も、こんなことを話しました。「実習中に夏休みがあって夏休み明けに『夏休みどこいったん？』ときいても返事がなかったんです。本人だけでは行けるところも限られているし、みんながみんな余暇利用のサービスを使っているわけでもないです。家族も高齢になったり、仕事をしていたりすると長期休みでもどこかに行ける状況ではないんですよ。」

更にこんなこともききました。施設が利用者と利用者の家族向けに作っている通信・新聞に、職員が夏休みに自分のいった旅行の話しかくと「いいね～、旅行に行けて！」という声が利用者の家族から複数上がったというエピソード。

このようなことから施設が行う「旅行」の意味がどのくらい大きなものかが想像できると思います。

### ■援助職チームになる

旅行は職員たちにとっても、プラスの効果がありました。宴会では、ゲーム大会、大浴場ではいっしょに汗を流します、背中も流します。若い女性職員でも入浴介助後の食事、宴会準備…と進めていくとメイクの時間すらありません。でも、そうしたなかで、新旧の職員が共に時間を過ごすことで職員の結束、職員間のお互いの信頼につながっていきました。職員集団の「われわれ感情」の形成です。

もちろん事件はいろいろ起こります。万全を期していてもです。それでも何とか、やりぬくこと、その達成感が私たちの仕事の醍醐味です。「旅行がない！」という状況が続いて数年。私が関わっているところでは、来年旅行が復活です！ひとまず一回ですが。秘かに私はめちゃくちゃに楽しみにしています。

### ■時給 100 円台

利用者に「有給休暇」制度を持っているところもあります。しかし、多くは働いた分だけ、実習費（利用者のお給料）が出るというしくみです。そして、働いてはじめて実習費になる売り上げを叩き出せます。そのための作業の時間を確保、それが利用者の実収入に直結するというのが今のよくある知的障害者の労働現場の現状です。そして、その作業での相場がタイトルにある1工程につき1円というものです。時間給でいうなら、全国平均で時給約120円というような労働の現場なのです。

行事を取るか？収入を取るか？それを常につきつけられている現場でもあるのです。



⇒伊勢のおかげ横丁ではショッピングに「てこね寿司」「伊勢うどん」「赤福餅」と本当にたのしかったなあ～。

